

ある日の育児日記から

(92)

佐藤 和代



とで圭に聞きました。「圭は何がきらい?」「えーと、ブルーチーズと、ういのゲラタン」。ま、いいか、よそでは出されそうにないわね。子どもに何食わせてんだ、と非難されそうだけど。

今月は圭の誕生日があり（九歳になりました）友達を招いてパーティーを開きました。敬が、「よし、今年はお父さんが料理してやるぞ!」とはりきって、あさりのスバゲティ、ハンバーグとにんじんグラッセ、ポテトサラダ、それにケーキと紅茶、というメニューを用意しました。敬にしてはめいっぱい子ども向け…の料理だったのに、ふたをあけたら圭の友達の「これきらい」「食べられない」の大コールにみまわられてしまいました。敬は「どうしてこんな好き嫌いの多いやつばかりなんだ!」と啞然。

多少の好き嫌いがあってもいいとは思うけど、みんな実食堂々と「これはきらい」と主張するのにびっくり。私の感覚からすると、きらいって言うのは恥ずかしいことなんだけど…。好き嫌いの主張も自分の表現、当然していいこと、というのが風潮なのかしら。疑問をいだきつつ、よその子に「食べ物を残すときはごめんなさい、という気持で」なんて説教するほどの信念もなく、残り物を片付けた私。あとで圭に聞きました。「圭は何がきらい?」「えーと、ブルーチーズと、ういのゲラタン」。ま、いいか、よそでは出されそうにないわね。子どもに何食わせてんだ、と非難されそうだけど。

